

一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10-10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42-0211
定価 1部 100円
橋本 清 文 堂



初代校長
富田 先生

母校の草創期と

壮士富田輝象先生

廃藩後、明治五年八月学制が發布され、

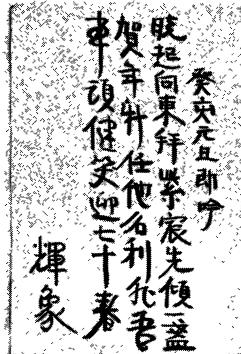
「自今以後華土族農工商及婦女子必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」との学事奨励に關

六年五月閉鎖となった。

同十七年十月同校付属初等中学校、

同二十一年十月に県と大谷派の共立

する被仰出書が出て以来、幾多の変遷をへて、各県一校の県立中学、即ち、吾々の母校が誕生したのである。



富田輝象書
大正十二年正月
に令息武彦氏に
あてたもの



(現在有る 頌 德 碑)

この間、県政の空白状態があり、(三年間に知事の更迭四回)新規に赴任された、三間正弘知事は伝家の宝刀とも云える、原案執行権を発動して、同年七月五日県令第三八号を以つて、石川県尋常中学校の設置が告示されたのである。

久しく生れ出さずして生れ得なかつた、県立中学校は、県令告示と同時に、共立の中学生、一年一五四名、二年七九名、三年一九名、四年八名、五年三名、計二六三名を以つて発足をみたのである。

五年生、新山、石田、中村の三氏が、第一回卒業生として、明治二十七年に巣立ちを致しました。

暫く空席であつた学校長に、当時能美郡の郡長であつた、富田輝象氏が任命されたのは、二十六年八月のことである。

先生は儒学・国学に培われ、短期間ながら、洋学の洗礼をうけられ、金沢士族としては、比較的進取性に富んだ、壮士であつたとか。

維新の変革に立ちおくれた一金沢士族として、土族結社「忠告社」の一員でもあつたが、先生は新権力につながる官僚特権か旧藩士の救済事業か、との迷いもあつた。征韓論、大久保暗殺の紀尾井坂事件に対して結社同人に、先生は終始私情をすて正論を主張され、又、十六年に北海

道開拓事業(土族救済)に参加の爲、官職を捨てた事もあつた。

校長としての輝象先生は、眼光燭とした壮士の風貌の持ち主であつた。しかし、当時としては進歩的であり、努めて私塾的な形式に終始して、魂のふれあいの場を求めめる様に努力された。

その生活態度は常に野人的な壮士振りを発揮し、酒を好み、自作の詩を吟じて楽しむ風情があつたとのことである。

因みに、藩祖前田利家公の桶狭間の合戦の武功を、次の様に読んでおられる。

鞍横驍將首 鮮血濺戰袍
誰識三州地 槍頭半段功

などは、壮士富田輝象校長の面目を遺憾なく示したものと云えよう。

日清戦争前後四年間、奉職された先生の銅像(昭和三年七月建立)が昭和十八年九月大東亜戦争の際、時局の要請に依つて供出されたのも、奇しき縁とも考えられる。

終戦後、昭和三十年、初代の一泉同窓会長英安吉氏等の尽力により、親しく先生の警效に接した。本多政樹先輩の揮毫になる「公心巍然」と刻した頌徳碑が、同年四月に建立された。

(この史実は泉丘高校蔵の資料によるもの)

「一泉」第五号によせて

泉丘校蔵書解題目録の

編集を終えて(2)

山 森 青 硯

○前田利家肖像軸

泉丘校に軸止に「前田利家肖像」と墨書した一軸がある。落款は「源幸筆 源昌謹写 印」とあり、70糎×122糎、「石川県立金沢第一中学校」の蔵書印がある。一中目録には第五部五類 山本光汀画 五五〇 明治42・9、と所載。「金沢一中泉丘高校七十年史」一四〇頁に其の全容を掲げ左記附記がある。

の毎年六月の寄宿舎武道大会の際に掲げられた。此図は県工の図案絵画科の先生山本光汀(本名昌)の模写されたものであろう(鑄木勢岐氏談)図柄は、前田利家公大鯨尾の兜をかむった馬上勇姿である。按うに藩祖前田利家公(桶狭間)大鯨尾の肖像画は珍品であり、筆者管見本軸が始であり終りである。大鯨尾の兜と云えば、すぐ様末森の陣を思い出さる。(尾山神社絵馬堂に掲げる利家末森出陣の大額)小松砂丘氏川辺御桶筆画の模写)山本画師は原本なきに、明治四十二年揮毫されたことあるまい。筆者色々資料物色している内に、明治三十二年四月宇都宮書店刊和田文次郎著「前田利家公」巻頭写真に、一中画軸と寸分たがわぬ利家肖像(白馬首一つ)があった。

左脇に「桶狭間合戦に於ける前田公の勇武」とあり、同書凡例に「本書の冠頭に画ける所の公が桶狭間合戦に於ける図は石川県工業学校に蔵むる所のものに拠る」とある。依つて山本画師の原画が県工に蔵していたことが解った。今や利家を語るものは悉く利家大鯨尾を即(そく)末森戦と結びつけている。史家和田文次郎は此のことを未知の筈はあるまい。「加賀文化」第六号に、氏家栄太郎氏が「前田利家公桶狭間凱施図に就いて」と題し

矢三四筋兜の背から腰の辺に立ち、鞍の塩手に首四つ、槍の身に白髪首一つ貫き、馬にも矢二三筋つ、さつている。大鯨尾に首一個の絵一品もない。然かも水戸、熊本辺の画師ばかりであった。前記金谷武英氏書巻末に、命臣金谷武英記其来由 臣武英謹閱公家系譜暨官庫牒籍 国祖於桶狭間敢戦無不詳只如此所図者一無所見是甚可疑然元和以降昇平已久諸家珍藏記録日著也焉知不有此図所據在其中乎今姑録塩田華之辞以備後考願於 国祖赫々盛蹟何啻管約一斑乎哉 嘉永元年戊申陽月 臣金谷武英謹誌 とある。碩学金谷武英ですら、永禄三年(一五六〇)桶狭間の様相不詳と述べている。孤本泉丘本が正か、他本誤か、史家に課せられた大きな課題であろう。筆者知るものとしては、

佐々木泉竜画(野町二丁目坂井正雄氏蔵)

宗信画(博労町七八小島忠義氏蔵)がある。黒本稼堂先生は其者に

今余が所蔵の幅は熊本に於て獲たる者なれば、同藩士の需に応じて應成の写ししものなる事疑なし。かくの如く他藩に於ては、此図を写さしめて、以て五月の端午にかけて男の子たるものは、皆大千代

